動かぬ指 20年磨いた音

ジストニア患うピアニスト「無駄な道ない」

新進気鋭のピアニストとして期待されながら、病魔に襲われて突然指が動かなくなった。そんな男性が約20年をへて、本格的な演奏をCDに収めるまでに回復した。特効薬のない病気に向き合いながら、音楽活動を続けている。

「職業を変えた方がいいかもしれない」。神奈川県の倉本卓さん(43)は22歳だった1998年、師事していたピアニストに告げられた。留学中のオーストリア・ウィーンの病院で、「ジストニア」と診断された。

左手の指でピアノの鍵盤を押した後、意思に反して指が上がらない。異常が生じるのは演奏時だけだが、「すべてが終わった」と絶望に包まれた。

6歳でピアノを始め、15歳で全日本学生音楽コンクールの中学生の部全国大会で1位に。ウィーン国立音楽大学に留学し、本格的に演奏活動を始めようとした矢先だった。

あきらめきれず、帰国後、大学病院を受診してリハビリを始めた。だが、ピアノを練習するほど症状は悪化、異常がなかった右手の指も思うように動かなくなった。

それでも「いつか自分は絶対治るんだ」と言い聞かせた。軽くタッチするだけで演奏できる電子ピアノを使ったり、それまでと違う呼吸法や指使い、弾きやすい選曲をしたり。工夫をこらしながら演奏を続けた。

ピアノを演奏する倉本卓さん

事態が好転し始めたのは3年前。東京女子医大で音楽家の病気に詳しい酒井直隆医師（現・さかい整形外科）の診断を受けた。筋肉がこわばるパーキンソン病の薬など数種類を出された。さらに「ゆっくり演奏する」など実際の演奏を取り入れたリハビリを指導された。次第に力まずにピアノを弾ける感じがした。

ショパンの夜想曲21曲を収めたCDを一昨年に録音。都内や関東近辺の楽器店においてもらっている。音楽雑誌でも取り上げられた。指の動きはいまも好不調があるが、倉本さんはいう。「人生無駄な道は無い。ジストニアになって、より丁寧に弾くようになった。磨けば輝く宝石のように音を再発見できた」

病気 音大生の1%

ジストニアは筋肉や骨に異常がないのに、体が思うように動かなくなる病気。脳の働きに関係あるとされるが原因は不明な点が多い。診療ガイドラインも昨年発行されたばかりで、あまり病気への理解が進んでいない。

だが大阪大学の望月秀樹教授(58)らが2014年、ある音楽大学の学生568人を対象に調査したところ、ジストニアとみられる学生は約1%いた。望月教授は「音楽の世界は競争が激しく、弱みと受けとめられないよう病気を隠す場合もあり、実態はさらに多い可能性がある」という。

（小堀龍之）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。